Billieve

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｂｉｌｌｉｅｖｅ

【Ｎコード】

Ｎ２４６３Ｉ

【作者名】

ｓａｋｕｒａ

【あらすじ】

２００９年の夏、朝風　萌は、彼氏の岡本　優に振られた。それから３カ月。冬になって、萌は一人の男性に出会った。彼の名前は三神　翔。優に振られて、誰も信じられなくなった萌は、翔に出会ったことで、人を信じるということがどれだけ大切なのかを少しずつ思い出していく。

第1話「別れ」

２００９年夏、ここ1年間ずっと連絡をよこさなかった彼氏、岡本　優君から、突然携帯に電話が掛かってきた。
「もしもし……。……萌？」
久々に聞いた優君の声は、少し疲れているように思えた。
「優君！？今まで何やってたの？私……心配してたんだよ？」
涙声でそう言うと、優君は申し訳なさそうに謝った。
「ごめん。……今、時間ある？」
時計を見ると、夜の１１時だった。
会いたいし、聞きたいことは山ほどある。
この1年間、何処で、何してたの？誰と居たの？
どうして一度も連絡くれなかったの？
「何処に、行けばいいの？」
「いつも待ち合わせする場所……覚えてるよね？」
「覚えてる……覚えてるよ」
「今すぐそこに来て。大事な話があるんだ」
こっちだって聞きたいことがある。
私は、身支度も化粧も何もせずに、お母さんにも何も告げずに、家を出た。
「萌？何処行くの！？」
お母さんが玄関から叫んでる。でも、そんなことはどうでも良かった。
今は、ただ走るだけ。

優君との待ち合わせ場所についた。待ち合わせ場所といっても、ただの公園。でも、ここは私と優君が初めて出会った場所。
だから、私にとっては、特別な場所。
走ったせいで、髪と息が乱れていた。こんな姿、優君に見せられな

い。そう思い、急いで手で髪を整えた。でも、必死に走ってきたせいか、息だけはどうしても整わない。
優君は、先に来て、待ってくれていた。
私は、乱れた息をそのままに、名前を呼んだ。
「優君！」
声がかすれた。
私が駆け寄ると、優君は、気まずそうに目を逸らした。
「萌……。この1年、連絡出来なくてごめん」
目を逸らしたまま言われても、謝られた気がしない。
「優君。私ね、聞きたいことがたくさんあるの」
優君は、無言で頷いた。
「この1年間、何処で、何してたの？誰と居たの？どうして1回も連絡してくれなかったの？私のこと、どう思ってる？」
優君は、私の言葉を遮って、私を抱きしめた。
いつもは、温かさを感じるのに、今は、何も感じない。
「今から言うことは、本当のことだよ。俺は、この1年間、アメリカで映画制作の勉強してた。そこで会った日本人の女と、付き合って、一緒に住んでた。だから、連絡出来なかった。萌のことは……今も好きだよ。でも、このまま萌と付き合ったら、俺は二股かけてることになる。そのこと、鈴にしられるのが怖いんだ。明日、朝一番の飛行機の便で、アメリカに戻る。だから……俺達、別れよう」
「別れよう」というその言葉が、心の中で、何度も繰り返される。
どうして、急にそんなこと言うの？
私は1年も待ってたのに。電話してもつながらない。メールしても返事が返ってこない。
それで、1年間、ずっと待ってたのに。突然携帯に電話してきて、「今時間ある？」って言われて、ここに来た。優君は私が居るのにもかかわらず、他の女と付き合ってた。二股かけることになるから、別れよう？意味分かんない。納得できないよ。私は優君のこと、好きなのに。大好きなのに。

優君がアメリカに行ったことなんて、知らなかった。一言、言ってくれたら私も一緒に行ってたのに。映画制作に興味があることだって、知らなかった。優君がアメリカで他の女と付き合ってたことも、知らなかった。ってゆーか、その女と付き合った時点で二股かけてることになるし。

考えてみたら、私は優君のこと、全然知らなかった。誕生日も、血液型も、好きな食べ物も、好きな歌も。携帯番号とメールアドレス以外、何も知らなかった。

「携帯持ってる？」

優君が、急に問いかけてきた。携帯なんて、慌てて出てきたから持ってない。

「持ってないけど」

「後で、俺の番号とアドレス、消去しといて」

そう言って、優君は私を置いて、公園を出て行った。

消去なんて、出来るわけないよ。好きな人の、携帯番号とメールアドレスだよ？

涙が、溢れてくる。さっきよりも、大粒の涙が。

この夏、私は大切な人を一人、失った。

第1話「別れ」（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。これからどんどん更新していくので、感想よろしくおねがいします。

第2話「二度目の災難」

優君と別れてから3ヶ月が経った。時が流れるのはあっという間だと、改めて実感した。あの時のことが原因で、私は、人を簡単に信じられなくなってしまった。
学校に行っても、家に居ても、いつも人の目を気にしてしまう。
そんなんじゃなかったのにな。
今の私は、本当の私じゃない。

今日は、久々に親友の芹沢　絢と会う約束をしていた。絢とは幼稚園から一緒で、唯一幼馴染といえる関係。
待ち合わせた家の近くのファミレスに来たが、まだ絢は来ていない。
私は、温かいスープを注文した。
１０分ほど待った。
注文したスープを持ってウェイトレスが来るのと、絢が来るのは、ほぼ同時だった。
「ごめん萌。遅くなっちゃった。随分待ったよね？ホントにごめん！」
絢は走ってきたはずなのに、全然息が乱れていなかった。
もしあの時、今の絢と同じように、「ごめん優君。遅くなっちゃった。随分待ったよね？ホントにごめん！」って言えたら、優君は「別れよう」なんて、言わなかったかな？
その時、誰かに思い切り肩を掴まれた。
その「誰か」は、絢だった。
「萌！？何考えてるの？何かあった？どうしたの？ウェイトレスさん、萌が注文したスープ持ってきてくれたのに、萌が何にも反応しないから、スープだけ置いて、戻っちゃったよ？」
「えっ？あぁ、絢。ごめん。あの……何でもない。何でもないよ」

気が付いたら、私がさっき注文したスープが目の前にあった。
「何でもなくないよ。いつもの萌じゃない」
やっぱり、幼馴染には、何でも分かっちゃうのかな。
絢には、3ヶ月前に私が優君に振られたことを、言っていない。
絢に言ったら、毎日メールとか電話とかくれて、迷惑掛かっちゃうから。
だから、絢の前では、必死で普通の様に振る舞った。
「本当に何でもない。絢も何か頼めば？」
声が、かすれそうになった。絢に嘘をついたのは、これが初めて。
いつもは、どんな小さなことでも、絢には正直に話していたのに。
絢は、コーヒーを注文した。
そのコーヒーが運ばれてくるまで、私達は一言も言葉を発しなかった。
「お待たせしました。コーヒーです」
「あ、どうも」
絢が、笑顔でお礼を言う。
そういえば、最近笑わなくなったな。
絢は急に真面目な顔になって、私の目を、目正面から見据えた。
「萌。お願い。私にだけは話して。小学生の頃、隠し事は無しって、言ったじゃない」
私は、何も答えることが出来なかった。
その時、都合良く携帯に電話が掛かってきた。
電話は、バイト先の上司、松宮　悟さんからだった。
私は、絢に断って、一度席を外した。
『もしもし、朝風です』
『あ、萌ちゃん？俺。今暇？』
『あの……はい、暇です』
『今から会える？』
『はい。全然大丈夫です』
『じゃあ、駅前のファーストフード店で待ち合わせでいい？』

『はい。了解です』
電話を切った時、私は、正直ほっとした。
絢から逃げる口実が出来た。
席に戻り、絢に用事が出来たことを伝えた。
「ごめん絢。私用事出来ちゃって……。また今度話すね。お金払っとくから」
「えっ？あ、うん。ありがと。気を付けてね」
「じゃあね」
「バイバイ」
絢は、またも笑顔で「バイバイ」と、別れの言葉を言った。

私は、待ち合わせたファーストフード店に、早く行ったつもりだったのに、松宮さんの方が、早く来ていた。
女より、男の方が待ち合わせ場所に来るのが早いのかな。
「松宮さん。遅くなってすみません」
優君に振られてから、バイトを休んでいた。
「いや、全然。今日は、萌ちゃんと二人だけで話したくてね。もちろん仕事の話だよ」
私は、出版社でバイトをしている。でも、全然仕事はこなせていない。
何となく、松宮さんから目を逸らし、俯いてしまった。
「萌ちゃんには、うちの会社を辞めてほしいんだ」
予想通りの言葉が、松宮さんの口から発せられた。
「はい、分かりました。今までお世話になりました。今日、辞表書いてきます」
「辞表はもうあるよ。俺が、君の筆跡真似して書いた」
分からなかった。そこまでして、私に辞めてもらいたかったなんて。
「もう来なくていいから」
そう言って、松宮さんは席を立ち、お金も払わずに出て行ってし

まった。

今年になって、二度目の災難だった。

第2話「二度目の災難」（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2463i/

Billieve

2010年10月17日02時24分発行